

本文解説

大江山

和泉式部、保昌が妻にて丹後に下りける
ほどに、

和泉式部が、（藤原）保昌の妻として丹
後の国に下った頃に、

京に歌合ありけるに、小式部内侍、

都で歌合があつたときに、小式部内侍が、

歌詠みにとられて詠みけるを、

定頼中納言たはぶれて、小式部内侍あ
りけるに、

「丹後へ遣はしける人は参りたりや。

「丹後へおやりになった人は参上したか。

いかに心もとなく思すらむ。」

（あなたは）今、どんなに待ち遠しくお
思っているだろうか。」

と言ひて、局の前を過ぎられけるを、

御簾よりなからばかり出でて、

わづかに直衣の袖をひかへて、

ほんの軽く（定頼中納言の）直衣の袖を
捉えて、

大江山いくのの道の遠ければまだふみ
も見ず天の橋立

大江山から生野を通って行く道が遠いの
で、まだ天の橋立の地を踏んでみたこと
もありませんし、母からの手紙も見えてい
ません。

と詠みかけけり。思はずに、あさましく
て、

「こはいかに。かかるやうやはある。」

「これはどうしたことだ。このようなことがあるのか、いや、あるはずがない。」

とばかり言ひて、返歌にも及ばず、

とだけ言つて、返歌もできず、

袖を引き放ちて、逃げられけり。

袖を引き放つて、逃げ去りなされた。

小式部、これより歌詠みの世におぼえ
出で来にけり。

小式部内侍は、これ以後、歌詠みの世界
で名声が高まったということだ。

これはうちまかせての理運のことなれ
ども、

かの卿の心には、これほどの歌、

ただいま詠み出だすべしとは知られざ
りけるにや。